



奄美群島喜界島から得られた標本に基づく琉球列島初記録のヒラスズキ

中村潤平¹・大富 潤²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ いおワールドかごしま水族館（鹿児島市）
 j-nakamura@ioworld.jp (corresponding author)
² 鹿児島大学水産学部（鹿児島市）
 ohtomi@fish.kagoshima-u.ac.jp
³ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
 motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 02 November 2021
 Revised 06 November 2021
 Accepted 07 November 2021
 Published 08 November 2021
 DOI 10.34583/ichthy.14.0_13

Junpei Nakamura, Jun Ohtomi and Hiroyuki Motomura. 2021. The Blackfin Seabass *Lateolabrax latus* (Perciformes: Lateolabracidae) from Kikai Island, Kagoshima Prefecture, Japan: the first record from the Amami Islands and the first specimen-based record from the Ryukyu Islands. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 14: 13–16.

Abstract

A single specimen (466.0 mm standard length) of the Blackfin Seabass *Lateolabrax latus* Katayama, 1957 was collected from Kikai Island, Amami Islands, Kagoshima Prefecture, Japan. In Japanese waters, *L. latus* has previously been recorded from Ishikawa and Ibaraki prefectures south to southern Kyushu and the Osumi Islands, and from several islands in Okinawa Prefecture; all Okinawan records were based only on photographs. The Kikai specimen therefore represents the first record of *L. latus* from the Amami Islands and the first specimen-based record of the species from the Ryukyu Islands.

スズキ科魚類 Lateolabracidae は東アジアの温帯域に分布するスズキ属 *Lateolabrax* のみから構成され、スズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier, 1828), ヒラスズキ *Lateolabrax latus* Katayama, 1957, およびタイリクスズキ *Lateolabrax* sp. [学名に関しては本村 (2020) に詳述] の3種が知られている (波戸岡, 2013; 中山, 2018)。

このうち、ヒラスズキは国内において主に鹿児島県大隅諸島以北の南日本沿岸域に分布し、水産上重要種と扱われ、遊漁の対象としても人気が高い (中山, 2018; 畑, 2020; 下瀬, 2021)。また、本種は外海に面した岩礁域を主な生息地としているが、河川の淡水域に出現することも知られている (酒井ほか, 1998; 村瀬ほか, 2012)。

2021年5月25日に鹿児島県奄美群島喜界島において1個体のヒラスズキが釣獲された。琉球列島における本種の分布記録は沖縄県内 (沖縄島, 伊是名島, 久米島, および石垣島) からの写真による記録に限られていた (下瀬ほか, 2011; 三浦, 2012; 下瀬, 2021)。したがって、喜界島産標本はヒラスズキの奄美群島における初めての記録および本種の琉球列島からの標本に基づく初めての記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は村瀬ほか (2012) にしたがった。標準体長は体長または SL と表記し、体各部の計測はノギスを用いて 0.1 mm までおこなった。生鮮時の体色の記載は、固定前に撮影されたカラー写真 (Fig. 1) に基づく。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており、上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。なお、本稿ではタイリクスズキに適用する学名を中山 (2018) と本村 (2020) にしたがって *Lateolabrax* sp. とし、琉球列島の範囲は中坊 (2013) にしたがって奄美大島から与那国島までとした。

Lateolabrax latus Katayama, 1957

ヒラスズキ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 157483, 体長 466.0 mm, 鹿児島県大島郡喜界町小野津漁港 奄美群島喜界島, 水深 5 m, 釣り, 2021年5月25日, 河上弘仁。

記載 計数値と体各部の体長に対する割合 (%) は Table 1 に示した。体は前後方向に長く、側扁する。体高は高く、腹鰭起部で最大。尾柄は太く、尾柄長は尾柄高の 193%。体背縁は吻端から背鰭第 6 棘起部にかけて上昇し (眼の上方でやや湾入する), そこから尾柄部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は下顎先端から胸鰭起部にかけて下降し, そこから臀鰭起部にかけては体軸と並行, その後,



Fig. 1. Fresh specimen of *Lateolabrax latus* from Kikai Island, Amami Islands, Kagoshima Prefecture, Japan (KAUM-I. 157483, 466.0 mm SL).

臀鰭起部から尾柄部にかけて上昇する。口は端位で口裂は大きく、下顎先端は吻端より前方に位置する。上顎後端は眼の後縁直下より前方に位置する。眼と瞳孔は正円形。鼻孔は2対で近接し、眼の前縁の前方に位置する。前鼻孔は背腹方向に長い楕円形で後縁に皮弁を有し、後鼻孔は前後方向に長い楕円形。前鰓蓋骨の縁辺は鋸歯状で、角隅部に5本の小棘を有する。主鰓蓋骨の上方に大きな後方を向く2棘を有する。鰓蓋の後縁は円滑。頭部、体側、および各鰭の基部は櫛鱗に覆われる。下顎腹面に2列の鱗列がある。側線は1本で、鰓蓋上方から尾柄部にかけての体側に位置する。肛門は臀鰭起部直前に位置する。背鰭起部は鰓蓋後端よりも後方、背鰭基底後端は臀鰭基底後端より前方にそれぞれ位置する。背鰭棘は第1棘から第6棘に向かうにつれ徐々に長くなり、第6棘から第12棘にかけて徐々に短くなる。背鰭第13棘は第12棘より長い。胸鰭基底上端は鰓蓋後端より前方、下端は鰓蓋後端より後方にそれぞれ位置する。胸鰭後端は背鰭第8棘起部直下付近に位置する。腹鰭起部は胸鰭基底後端より後方に位置する。たたんだ腹鰭の後端は背鰭第10棘起部と第11棘起部の間の直下付近に位置する。臀鰭起部は背鰭第8軟条起部直下付近に位置する。尾鰭は截形で、後縁の湾入は浅い。両顎には細かい円錐歯が密に並ぶ。鰓耙は棒状で細長い。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) — 頭部と体側は光沢をもつ銀白色で、背面は色味が強く暗青色がかり、腹面は白色がかかる。瞳孔は黒色。両唇はおおむね黄白色で、一部暗色がかかる。背鰭棘は灰色で、棘間の鰭膜は暗青色。背鰭軟条部は黄色みがかかる灰色。胸鰭は灰色。腹鰭、臀鰭、および尾鰭は暗青色。

分布 東アジア固有種で日本と韓国（朝鮮半島南部と済州島）に分布し、国内においては石川県能登半島から鹿児島県薩摩半島にかけての日本海・東シナ海沿岸、茨城県から鹿児島県大隅半島にかけての太平洋沿岸、瀬戸内

海、鹿児島湾、大隅諸島（種子島、屋久島、および口永良部島）、沖縄諸島（沖縄島、伊是名島、および久米島）、および八重山諸島石垣島から記録されていたが（下瀬ほか, 2011；三浦, 2012；村瀬ほか, 2012；波戸岡, 2013；細谷, 2015；ジョン, 2017；岩坪・橋口, 2017；木村ほか, 2017；中山, 2018；畑, 2020；下瀬, 2021）、本研究により新たに鹿児島県奄美群島喜界島における分布が確認された。

備考 喜界島産標本は背鰭軟条数が15、臀鰭軟条数が9、側線下方横列鱗数が14、体長に対する吻長が10.0%、下顎背面に発達した鱗列を有する、尾柄が太く短く、体長に対する尾柄長が19.1%、および尾鰭後縁の湾入が浅いことなどの特徴により Katayama (1957)、村瀬ほか (2012)、波戸岡 (2013)、および Yokogawa (2019) が報告したヒラスズキ *Lateolabrax latus* の標徴と一致したため本種に同定された。

ヒラスズキは大隅諸島以北の南日本沿岸では多くの個体数が生息している一方で（村瀬ほか, 2012；畑, 2020）、これまで琉球列島からの記録は少なく、久米島で釣獲された個体（全長60–70 cm程度）の写真（磯, 2006）、伊是名島で釣獲された大型個体（体重3.8 kg）の写真（沖縄タイムス, 2007）、石垣島の浦底湾で観察された個体（全長40–50 cm程度）の水中写真（下瀬ほか, 2011；下瀬, 2021）、および定置網で漁獲され沖縄県南城市知念漁協魚市場に水揚げされた中型個体（体重0.5 kg）の写真（三浦, 2012）の散発的な記録のみが知られていた。また、下瀬ほか (2011) は2001年と2002年に沖縄島北部で日本本土から畜養のために導入されたヒラスズキが逸出し、周辺で釣られていたこと、1993年に沖縄県那覇市泊漁港でヒラスズキが水揚げされた記録があることを記した。これらのことから、喜界島産標本はヒラスズキの奄美群島における初めての記録となると共に、本種の琉球列島からの標本に基

づく初めての記録となる。なお、Kamohara (1957) により鹿児島県奄美大島から名瀬市場での目視観察により 2 個体（全長約 60 cm）のスズキが記録されているが、スズキとヒラスズキの分布状況に加え、当該文献の出版年はヒラスズキの新種記載と同年であるため、Kamohara (1957) のスズキはヒラスズキである可能性が高い（下瀬ほか, 2011；本研究）。

琉球列島におけるヒラスズキの出現は、上述の通り中・

大型個体の散発的な記録のみであり、幼魚は記録されていないため、本種は琉球列島で再生産していない、もしくは個体数が極めて少ないと考えられる。下瀬ほか（2011）と下瀬（2021）は沖縄県内におけるヒラスズキの出現を浮遊期に黒潮東側の海流渦により屋久島以北から南下している可能性を示唆した。喜界島におけるヒラスズキの出現も、台湾以南に本種が分布しないことを考慮して、日本本土由来の個体が黒潮の外側から浮遊期に南下し、成長した可能性があると考えられる。しかし、本種は生活史の中で幼魚が河川を利用することが示されており（酒井ほか, 1998；村瀬ほか, 2012）、河川環境に乏しい喜界島では本種が再生産できる可能性は低いと考えられる。また、過去に沖縄島において本種が畜養された経緯もあるため、人為的な導入の可能性も含め、琉球列島におけるヒラスズキの出現は今後の更なる調査が必要である。

謝 辞

本稿執筆に際し、喜界町の河上弘仁氏と町田賀法氏には標本の入手に際して便宜を図っていただいた。水産研究・教育機構 水産資源研究所の下瀬 環博士には沖縄県におけるヒラスズキの分布記録に関する情報と貴重な文献の提供を賜った。鹿児島大学水産学部の出羽優風氏には文献の収集、鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室のみなさまと同博物館のボランティアのみなさまには標本の登録・管理にご協力いただいた。上記の方々に深く感謝申し上げる。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費（20H03311・21H03651）、JSPS 研究拠点形成事業－B アジア・アフリカ学術基盤形成型（CREPSUM JPJSCCB20200009）、および文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」の援助を受けた。

引用文献

- 畑 晴陵. 2020. ヒラスズキ, pp. 213–214. 小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之（編）大隈市場魚類図鑑. 鹿児島大学総合博物館, 鹿児島. [URL](#)
- 波戸岡清峰. 2013. スズキ科, pp. 748, 1957–1958. 中坊徹次（編）日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 細谷和海. 2015. ヒラスズキ, p. 312. 細谷和海（編）山溪ハンディ図鑑 15 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 磯 淳一. 2006. その棲息, 国内南限とされる鹿児島説に一石！. サザンフィッシング, 2: 72–73.
- 岩坪洗樹・橋口 亘. 2017. 南薩摩の魚類図鑑 海辺の魚類・生態ハンドブック. 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館, 南さつま. 50 pp.
- ジョンビョル. 2017. スズキ科, pp. 110–111. 岩坪洗樹・本村浩之（編）火山を望む豊海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島市・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

Table 1. Counts and measurements of *Lateolabrax latus* from Kikai Island, Amami Islands, Kagoshima Prefecture, Japan.

	KAUM-I. 157483
Standard length (mm; SL)	466.0
Counts	
Dorsal-fin rays	XIII, 15
Anal-fin rays	III, 9
Pectoral-fin rays	16
Scale rows above lateral line	12
Scale rows below lateral line	14
Pored scales on lateral line	72
Measurements (% of SL)	
Total length	124.9
Fork length	122.3
Body depth at pelvic-fin origin	26.5
Body depth at anal-fin origin	22.0
Head length	31.9
Snout length	10.0
Orbit diameter	6.3
Interorbital width	7.2
Upper-jaw length	16.2
Postorbital length	17.5
Pre-pectoral-fin length	31.9
Pre-pelvic-fin length	38.4
Pre-dorsal-fin length	37.9
Pre-anal-fin length	73.6
Pre-anus length	70.0
Distance from anus to anal-fin origin	3.4
Length of dorsal-fin base	46.1
Length of spinous dorsal-fin base	28.7
Length of soft-rayed dorsal-fin base	17.7
Length of anal-fin base	11.5
1st dorsal-fin spine length	2.3
2nd dorsal-fin spine length	4.4
3rd dorsal-fin spine length	6.4
4th dorsal-fin spine length	11.0
5th dorsal-fin spine length	13.3
Penultimate dorsal-fin spine length	2.0
Last dorsal-fin spine length	5.2
Longest dorsal-fin soft ray length	15.2
Last dorsal-fin soft ray length	5.6
1st anal-fin spine length	2.2
2nd anal-fin spine length	7.9
3rd anal-fin spine length	9.2
Longest anal-fin soft ray length	13.0
Last anal-fin soft ray length	5.2
Pectoral-fin length	17.6
Pelvic-fin spine length	11.1
Pelvic-fin length	17.8
Caudal-peduncle length	19.1
Caudal-peduncle depth	9.9

- Kamohara, T. 1957. List of fishes from Amami-Oshima and adjacent regions, Kagoshima Prefecture, Japan. Reports of the Usa Marine Biological Station, Kochi University, 4 (1): 1–65.
- Katayama, M. 1957. Four new species of serranid fishes from Japan. Japanese Journal of Ichthyology, 6: 153–159.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太 (編). 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp.
- 三浦信男. 2012. 美ら海市場図鑑 知念市場の魚たち. ウェーブ企画, 与那原. 140 pp.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2020. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 560 pp. [URL](#)
- 村瀬敦宣・宮崎佑介・瀬能 宏. 2012. 屋久島産標本に基づくヒラスズキ *Lateolabrax latus* の再記載と河川における生息状況. 魚類学雑誌, 59: 11–20. [URL](#)
- 中坊徹次 (編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野. xlix + 2428 pp.
- 中山耕至. 2018. スズキ科 *Lateolabracidae*, pp. 228–229. 中坊徹次 (編). 小学館の図鑑 Z 日本魚類館. 小学館, 東京.
- 沖縄タイムス. 2007. ゲット! 沖縄タイムス, 2007年4月12日夕刊.
- 酒井治己・佐藤光昭・中村守純. 1998. ヒラスズキの種子島淡水域からの記録. 魚類学雑誌, 45: 107–109. [URL](#)
- 下瀬 環. 2021. 沖縄さかな図鑑. 沖縄タイムス社, 那覇. 207 pp.
- 下瀬 環・名波 敦・瀬能 宏. 2011. 石垣島で水中撮影されたスズキ属魚類. 魚類学雑誌, 58: 211–213.
- Yokogawa, K. 2019. Morphological differences between species of the sea bass genus *Lateolabrax* (Teleostei, Perciformes), with particular emphasis on growth-related changes. ZooKeys, 859: 69–115. [URL](#)